

（当時東京に唯一つ）の工学部（「工科大学」となったが、「総合大学のなかに工学部が設置されたのはこれが世界で最初」とされる。中島尚正編『工学は何をめざすか—東京大学工学部は考える—』（東京大学出版会、二〇〇〇年）九頁。

（5）参照、西日本新聞社編『九州自治州への提言』（一九七二年）。

（6）参照、大崎仁『大学改革一九四五—一九九九』（有斐閣、一九九九年）三〇七頁以下。なお、この「改革の大波」に対する世界史的視点からの批判的所見として、天野郁夫『二〇世紀の大学』（有斐閣『書齋の窓』四九七号、二〇〇〇年九月）四—五頁。

終りに臨んで、五十一年間の私の大学生活にこのような形でピリオドならぬセミコロンを打つことができましたことに、重ねて紫苑会に厚く御礼申し上げ、皆さまの母なる大学^{アルマ・マテル}・熊本県立大学と同窓会・紫苑会の一層の発展を心から祈り念じ上げます。

私の学生生活の振出しの頃、初めて文字どおり海を渡ってアメリカに留学した折に乗った船は、日本郵船の氷川丸でした。今は退役して横浜は山下公園の岸壁に繋留されている氷川丸を、昨年の秋、訪れました。そのとき詠んだ腰折れ一首、私の現在の心境を託したものととして披露申し上げることをお許しください。

若き日の吾を運びて大海原渡りし船の今こゝに休らふ

ご清聴、有難うございました。

〔註〕

- (1) 『九州大学七十五年史・通史』(一九九二年)、一〇八頁。
 (2) 参照、同書第三編「大学紛争」(二九七〜四三三頁)。
 (3) その誘致をめぐる福岡市と熊本市の間に激烈な綱引きがあったことは、よく知られている。福岡側が熊本は「年中日々寒暖ノ変化殊ニ甚ダシキモノアリ」「熊本ノ地方不健康ナルコト断乎トシテ疑ウヘキニ非ラズ」と言えば、熊本側も負けてはいず、「犯罪人の多数なるは福岡実に天下に冠たらんとす」「福岡の空気が一般に溷濁せるは天下の實際認識せる処」と応酬したといふ。参照、『西日本新聞』二〇〇〇年一月九日朝刊九面(「九州一〇〇年—九州大学開設」)。
 (4) これと対照的に、わが国では、明治初期に設立された工部大学校が幾度かの改組を経て一八八六(明治一九)年に帝国大学

は、先に第二として述べたところも加えて、こうなります。すなわち、「大学院（それも、すでに総合管理学部の上に立ち上がっているように、できれば博士課程まで）に支援された学部教育に重点を置く、現行どおり三学部体制の総合大学」！

最後、第四に、これからの時代に避けることのできない、学問と大学の、より一層の国際化について一言します。この場面での最大の問題点が、とくに人文社会の分野における、これまでの一方的受動関係から脱却した、日本から諸外国への能動的貢献にあることは、これもすでに言及したところですが、なお二つほど付け加えます。

一つは、国際化の道具ツルとしての外国語は、今では英語帝国主義 English imperialism と謂われるまでに英語が世界を席捲していますが、この現実には率直に認めるとしても、これからの世界がむしろ多様化・個性化に向かうとするならば、英語とともに他の諸外国語にも関心をおろそかにしてはなるまい、ということなのです。同時に、遠慮し卑下することなく日本語を世界の学界に通用する言語たらしめる努力も怠ってはならない、と思います。

二つには、われわれの mother tongue である日本語を愛し大切にすることです。よほどの言葉にかけての天才か、生まれつき或いは生活の環境に恵まれたバイリンガルならば、いざ知らず、普通の日本人のわれわれは、とくに人文社会の学問で国際的に貢献できるまでに深くものを考えるには、語彙、文法、論理、すべて mother tongue の日本語に拠るほかありません。もちろん、その際、ものにした外国語が少なからぬ助けとなるにしても、です。この意味で、外国語の学習と同時に、いや、むしろ第一義的には、日本語をとことん磨くことをこそ、われわれは心掛けねばなりません。

うが、当面、学問・大学における理系の偏重にブレーキをかけ、文系との調和を積極的に図らねばなりません。私は、熊本県立大学の文・環境共生・総合管理の三学部体制こそは、その魁けたりうるものと確信します。

第三に、学問の府である大学において、「研究と教育」の間にスタンスをどう取るかの問題があります。大学の社会的使命が、知の最前線に挑んで知の地平を拡張、その成果を社会に弘め伝承して、さらなる発展を螺旋状に期するにあることは、世間一般のつとに認知するところでしょう。前半部が先端的研究、後半部が高等教育ということになります。従来、大学では前者に大きく重心をかけ、その成果を学生に教育することで、かの使命は立派に果たされると考えられていました。あるいは、信じられていました。ドイツ流の「研究と教授の統一」です。しかし今や、先端的研究のいやが上もの高度化と高等教育の急激な大衆化は、研究と教育の乖離をどんどん進め、この理想を完全に絵に描いた餅にしまいました。

それではどうするか。今わが国で進行しているのは、両者の統一の理想を大学人個人のレベルで実現することを、個人の類い稀れな資質・能力に俟つかないこととして諦め、両者を基本的に分離して大学単位で分業させようという方向です。いわゆる大学院大学と学部大学への仕分けです。

制度的な対応としては他に代替策もないままに滔々と進行しているこの時代の趨勢の中で、本学はどのように舵を取るか。私は、本学の立地条件、歴史伝統、そして現有および潜在能力から、こう考えます。東京大学や九州大学のような大学院大学となることは、云うべくして実現は困難です。しかし、今日、まして将来は、大学の名に値する大学は社会の最先端の研究成果に立脚した高等教育を提供するものでなければなりません。そのためには、軸足は学部にあるとしても、自ら大学院を持ち、学部・大学院の有機的連繋を図るべきです。そこで、わが熊本県立大学の未来像

問題的応用の開発に連なる例少なしとせぬだけに、むしろ、なおさら然りとさえ云えそうです。そうすると、一般に「およそすべて学問には哲学が必要」ということになります。

第二に、密接に関連して、これまたすでに指摘したところですが、学問ないし大学における文系と理系の分業が究極の総合へ向けて均衡を保つべきこと、焦眉の急と云わねばなりません。たしかに、自然科学・工学技術の長足の進歩は、現代社会の驚くべき物質的な便益と豊かさをもたらしました。ドイツの著名な法哲学者・故ラートブルフは、彼の人生が始まった一九世紀末の社会について次のように書いていますが、二〇世紀の半ば敗戦の焦土の中に茫然と佇んだわれわれの場合も情況はそう隔たつてはいなかったこと、ここにおいでの方々の年配の方々には未だ記憶に新たと存じます。「その後も永いこと、自動車なし、映画館なし、ラジオなしが続いた世界。飛行船も飛行機もなかったし、電話も蓄音機もなかったし、電灯も電車もなかった。そう、自転車やタイプライターも、万年筆や腕時計もなかったし、それどころか、（皇帝の王宮に至るまで）浴室や水洗トイレさえなかった。私は（毎）朝、学校への道で、「お百姓さん」がぶんぶん臭い^{にお}ばたばた垂れる肥え桶を彼の荷車に空けるのを見、荷車の底と横板の隙間から半流動体の農業の黄金が道の敷石の上に滴り落ちるのを見ることができた。」自動車・ラジオ・電話はおろか、ジェット旅客機・カラーテレビ・ファクス・「ケータイ」・Eメール、勉学・研究の道具^{ツール}だけとっても、コピー・ワープロ・パソコン・インターネットと出現した半世紀後の今日を思うと、まさに隔世の感と云うもおろかです。しかし、その一方で“心”と“精神”は明らかに置き去りにされました。いや、それどころか、むしろ反比例して貧困化・頹廢の一途にあると云うも過言ではありませんまい。

“物と心” “物質と精神” のアンバランスを克服するには、究極的には学問体系の抜本的再構築に俟つべきでしょ

と体験に鑑みつつ、私は今、次のような学問観・大学観に到達しています。もとより決定的・終局的なものではありませんが、五十一年間の私の学究生活一応の結論として、以下、列举的に、しかし順不同でお話しさせていただきます、本日の講演の締め括りと致します。

五

第一に、現代ないしポスト現代の学問が、部分的諸科学への細分化と手段的諸技術への応用・実用化を宿命的必然としつつも、反面、知の全体性と目的性への視点をとみに欠落させ、今や恐るべき破滅的人間疎外の続発を見るに至っていることについては、すでに再三述べましたが、その克服には、真の意味での哲学の復権が急務と思われれます。真の哲学とは何か。学問者各自が、その学問的実存を賭して、知の全体と目的を一望しうる視点の設定を工夫し、己が学問営為の根底を問う、そういう真摯な知的努力ではないでしょうか。本講演の冒頭で触れた平俗な日常英語としての、ギリシャ語起源のフィロソフィーと区別するならば、ラテン語で科学的知識を意味するスキエンチアに対するプルデンチア、すなわち賢慮とか叡知とか智慧とか謂った方が適切かも知れません。

私は、この意味で、これまで「哲学ある実学」の必要を強調してきました。狭い視野で事足りりと考えられ勝ちな、実用に直結した知識や技芸であっても、いや、そうであればあるほど、その全体的位置と価値的座標を指し示す哲学を欠いては、究極的にどんな不慮の結果をもたらすことがあるやも皆目見当がつかず、社会的責任は全うされない、ということなのです。しかし、これは、実用には直結しそうにもない基礎理論・純粹理論についてもまた云えます。ここでは、とくに「学問のための学問」が標榜され、しかも、却って実学の場合とは比較にならず由々しい思いもかけぬ

る」と書き起こしましたが、まさしくそうだったのです。こうして、翌一九九二（平成四）年の一月、九州大学在職のまま「熊本女子大学社会科学部（仮称）設置準備委員会」に委員として加わり、以後二年有余、未だ海のものとも山のものともつかなかった新学部的设计、命名、教員選考から、認可めざしての何十回とない文部省・大学設置審議会との折衝、面接・実地審査に至るまで、処理に当りました。そして九四（平成六）年四月、名実ともに一新、再発足することとなった「熊本県立大学」に、敢えて九州大学を辞して馳せ参じたのです。

ここで私が人生航路を転換したのは何故か。それは、「人生意気に感ず」の情緒的動機もさることながら、何よりも、私にとって永い混迷期を経て漸く見えてきた曙光の中に「熊本県立大学」が浮かび上がってきたからに他なりません。高度化のためには細分化・専門化・技術化せざるをえない宿命にある現代の学問に、全体性と目的性を回復する「総合性」は如何にして可能か。この問いに答えるのに、社会科学系新学部として次代を先取りする「総合管理学部」を創設し、学部構成が人文・社会・自然の三大学問分野にバランスよく跨がり、しかも人間能力のスパンを超えぬ適正規模の非マンモス大学の本学こそ、恰好の実験の場となりうるのではなからうか、と考えたのです。

狙いは違わなかったと、私は思います。あれから六年と五ヶ月、当の実験の場の整備はさらに一層進みました。非営利組織管理（NPOアドミニストレーション）まで包括し公共管理（パブリック・アドミニストレーション）と企業管理（ビジネス・アドミニストレーション）を社会哲学と情報科学を媒介項に総合しようと試みる総合管理学部は、すでに大学院博士課程の設置を終えましたし、共学後その存立が危ぶまれていた家政学系の生活科学部は、人間生活と自然環境の共生を価値理念とする「理・工・医・農」総合的な、時代の先端理系学部として換骨奪胎、生まれ変わりました。残る伝統的学部の随一、文学部にも、総合文化コースの開設など、自己改革の動きが急です。さいわいに本学へやって来て初めて手にすることができたこのような実験的成果を実証的な手掛かりに、これまでの個人的な思索

からの、あるいは上からの改革に乗り出した時代、と云うことができましょう。この動きが、一九八九(平成元)年の「ベルリンの壁」の崩壊に始まる社会主義体制の瓦解によってもたらされた資本主義の自信回復という世界史的文脈と無縁でないことは勿論ですが、九一(平成三)年の大学設置基準大綱化(とくに一般教育・専門教育など授業科目区分の撤廃)を皮切りに、大学院制度の見直し||拡充・強化(旧帝大系国立大学の大学院「重点化」)、大学評価制度の導入(それも、自己評価から第三者評価への展開)、教員の選択的任期制の法制化、大学管理責任体制の引き締め、そして極め付きは昨年来急浮上の国立大学「独立行政法人化」問題、と矢継ぎ早の急テンポです。ここに見られるのは、善いも悪いも大学自治への根強い不信と云えます。あの古き良き時代の、伝統を誇った古典的大学自治よ今いずこ、とぼやいてみても始まらない。真剣な自主努力を怠った大学側の自業自得だ、と云ってしまったえばそれまでですが、しかし、今や遅きに失したとはいえ、真理をその時どきの権力の支配の下にはなく「永遠の相の下に」探求すべき学問に不可欠な「学問の自由」を制度的に保障する意味での「大学の自治」までも放擲する、風呂の湯と一緒に赤ん坊も流してしまうような、後悔先にたため愚を犯してはなりません。日本の大学は、いま、まさに正念場に立たされています。

この客観的「転換期」が、同時に私にとっても「転換期」となりました。一九九一(平成三)年、ちょうど今頃の季節でしたが、当時五八歳の私のところに熊本女子大学から或る話を持ち込まれたのです。二年半後を期して、既存の二学部第三の「社会科学系」新学部を増設し男女共学に移行する思い切った改革を断行することとなったので協力してほしい、ということでした。当時の松垣学長はじめ教職員の方々が何度となく福岡まで足を運ばれ、最後は福島知事自身わざわざ訪ねて来られるに及んで、ドイツへの講演出張を間に挟み数ヶ月間とつおいつ意を決しかねていた私も、終に踏み切りました。昨年上梓した専門書の「はしがき」を、私は「人生には時として思わぬ転機が訪れ

教育長と真っ向から対立し、ついに訴訟にまで纏れ込み、最後、高裁判決で審査会側に軍配が上がった、ということもありました。また、長期にわたって建築審査会と開発審査会、それぞれの委員を勤め、都市計画地方審議会にも会長として参画し、公益と財産権が矛盾し衝突する現場で判断を迫られる貴重な経験も致しました。しかし、混迷期における「実践化」の試行錯誤の最たるものは、何はともあれ、略称「三〇人委員会」への参加・協力にとどめを刺しましょう。これは、福岡市に本拠を置く西日本新聞社が福岡を中心に全九州規模で組織した民間の頭脳集団シンク・タンク的運動体で、正式には「あすの西日本を考える三〇人委員会」と謂い、一九七一（昭和四六）年から七四（昭和四九）年にかけて活動しました。当時から三〇年先——ちょうど今頃ということになりますが——の九州の政治・社会・経済・文化を大胆にデザインし行動指針として世に問おうとするもので、私は政治行政部会のメンバー、最後の頃は部会長として、「九州自治州」構想なるものを発案し議論をリード、これを同委員会の目玉に打ち出し、講演や出版5で啓蒙にこれ努めたのです。

こうして、混迷の裡から、「学際化」「国際化」「実践化」それぞれの角度からの試行的アプローチを通して“総合化”への展望が漸く開けてきたかに思われた折も折、舞台は突如一転、次なる第四幕へと移ります。

四

一九九〇年代に入って始まった戦後日本大学史第四期、そしてここでも奇妙に私個人の学究生活第四期がこれと符節を合して重なるのですが、それは、かの大学紛争の颱風一過後、二〇年以上もの永きにわたった各大学の余りに微温的な改革努力、ないし荏苒日を送る一時凌ぎの無策振りに痺れを切らした政府・文部省が、終に主導権を執って外

門論文を書いて学術書や学術誌に寄稿したり、各地の大学でドイツ語の学術講演を試みたりしたのです。さいわい、それなりの反響はありましたが、如何せん、世界の学界が急速に英語を共通語とする方向へ動いている現状にあっては、その効果には限度があったことを認めません。私の実験は結局「労多くして功少なし」に終わったようですが、外国語を英語に置き換えるなりするならば、私の考える「国際化」の方向性は決して間違っていないかと思えます。

三番目に「実践化」を挙げました。社会的実践活動が理論の対象である社会科学にあって、理論と実践がウェーバー的「価値自由」の意味における距離を厳然と保ちつつも弁証法的に不可分の関係にあることは云うまでもありませんが、ここでは、個々の研究者レベルで、同一人が学問的営為の成果を自ら社会的実践に活かす実践的検証の結果を学問にフィードバックする螺旋状の動的過程を「実践化」と謂うことにします。これが、全体への眼と目的意識の導入を必然ならしめ、「総合化」に大きく貢献するであろうことは、疑いありません。摸索期には、メフィストフェレスに誘惑されるまでのファウストよろしく、すぐれて「書斎の人」「象牙の塔の住人」だった私でしたが、この時期になると、何かと実社会からの要請も増えてきたこともあって、半ば他動的、半ば自発的に「実践化」を試みることになりました。各種行政の委員会・審議会の類に委員としてかかわるのが大学人としては最も典型的な形でしょうが、私の場合もそうでした。中でも、政令指定都市・福岡市、同じく北九州市のマスタープラン作り、市のレベルでは日本最初となった一九八二（昭和五七）年の福岡県春日市の情報公開条例作り、引き続いて福岡県、福岡市の情報公開条例作りに携わったときのこと、記憶に残ります。とくに、三つの情報公開条例案作成は、いずれも会長としての、しかも先例に乏しく従って所謂「学識経験者」のイニシアティブが強く期待される中の仕事でしたので、又とない実地の勉強になりました。なお、九州大学における先輩教授が知事になっていた福岡県では、その後も初代の情報公開審査会の会長を委嘱され、高校中退者情報の開示をめぐる頑なに非公開に固執する、文部省から出向の県

先ず「学際化」として、設定した専門テーマの究明に、できるだけ多くの関係学問分野の方法・成果を総動員することに努めました。ただ、できるだけ多くと云ってみても、現実には、自分でかなりの程度以上勉強した学科しか役に立たないわけですから、その種類と範囲は自ら限られてはきますが。私の場合、法律学、なかんずく憲法と行政法、より広く社会科学の中では政治学と行政学、部分的に財政学・経済学・経営学、ということになりました。多々ますます弁ずとばかり、もっと沢山の関連ないし周辺の諸学科にまで手を伸ばそうと欲張っても、それらを勉強してないことにはどうにもなりません。結局、その人その人の不断の着実な幅広い勉強だけが物を云うということです。なお、学際的研究は、各学科が蝟壺から這い出て有機的に協力しないと、結果は単に折衷のモザイクに終わってしまいます。そのためには、個々の科学を超えた全体的・価値的な関心と視点、その意味での「哲学」がどうしても必要となります。私には、そのような哲学をも自分のものとする努力を怠らなかつたつもりです。

次に「国際化」とは、とくに日本の社会科学に今まで致命的に欠けていた国際的通用性を確立することです。これまでの学問上の対外関係が、もっぱら先進諸外国から日本への一方通行で、逆方向の輸出は無きに等しかったのは、残念ながら周知の事実です。この余りにも大きな貿易赤字を解消し対等互恵の関係に立つことなしには、かの視野狭窄の根本的克服もありえないのではないかと私は考えました。この点で理系の学問に比べ文系の学問に本質的な大きな泣き所は言葉の障壁にあります。如何に困難でも、これを乗り越えなければ問題は解決しません。そこで私は、私にとって個人的事情から比較的使いやすい外国語であるドイツ語を介して、日本から外国へという意味で能動的な学問的国際交流を図ろうとしました。この第三期に入って、私は、大学紛争を挟んで実に一五年間も日本に閉じこもっていた「鎖国」を解き、一九七八（昭和五三）年三月、八三（昭和五八）年には一〇ヶ月、そして九一（平成三）年に半月と、ドイツを中心にヨーロッパへ何度も出掛けることになりましたが、この間、積極的に、ドイツ語で専

工学部)に遡るのであり、人文社会系の法文学部が設けられたのは漸く一九二四(大正一三)年になってに過ぎません。戦後の経済立国の国策が、この傾向にさらに拍車を掛けています。欧米の一流諸大学が古来、そして今も、文系と理系のバランスを保っているのは好対照と傍観者的に云って済ませうる問題ではないでしょう。もともと、中世ヨーロッパに生まれた大学なるものは、神学部、法学部、医学部、そして哲学部という所謂「古典的四学部」から構成されていたのであり、ドイツなどでは第二次大戦後に至るまで、今の工学部は“Technische Hochschule”として、伝統的「大学」すなわち“Universität”の学部として仲間入りさせてはもらえなかつたくらいなのです。その欧米においてすら、科学と技術の肥大に決定的な歯止めはかからなくなっているのですから、いわんや、理系の圧倒的優勢を生来の体質とするわが国の場合においてをや、ということになります。

こういう中で私の学究生活第三期は展開されました。二〇年以上という時間的にも最も長かつたこの時期は、本来、よく謂う“正—反—合”の第三段階の“合”として、曲りなりにも完成期となるべきはずでした。しかし、私にとつては第二段階の“反”が余りに強烈だったこと、にも拘らず客観的には当の衝撃は不毛に終わったことから、完成期には程遠く、カーヴを描きはしたものの摸索期のなお延長線上にある「混迷期」とでも称すべき期間となりました。学問と大学のあるべき姿は何か。さまざまの試行錯誤が続きます。

科学はとめどなく細分化して、それぞれ蝸壺に入り込み、技術は手段価値の実現に汲々として、目的価値に無感覺となる。恐るべき帰結を顕在化しつつある、この滔々たる時代の流れを克服するには、全体性の回復と目的感覚の復権、この意味での——一言で云うなら——“総合化”こそが急務である、ということまでは抽象的には一応云いうるとして、それでは、具体的にはどうしたらよいのか。私は、三つの方角から、この課題への接近を試みてみました。「学際化」と「国際化」と「実践化」です。

全国を、いや全世界を震撼させたさしもの新左翼エネルギーも、引き潮となるとあつという間でした。一九七〇（昭和四五）年、徒労感ただよう虚脱の裡に、戦後日本の大学史にとって、そして私自身にとっても、第三のステージが開幕します。一九九〇年代にまで四半世紀前後にも及んだこの期間を、運命の女神に突き放されながら、いや、まさにさればこそ、のど元過ぎてたちまち熱さを忘れ自己革新を怠って旧態依然の体質を温存した学問と大学が、現代社会の要請のまにまに表面的な量的発展を続けた蔭で、その宿命的病弊を致命的な臨界点にまで悪化させて行った過程、と総括しても、強ち過言ではありませんまい。

すでに近代とともに始まっていた人間知性の「科学」と「技術」への偏向（偏好）は、たしかにそれなくしては物質的豊かさの実現はありえなかったであろう反面、科学すなわち区分され区画された学問に免れがたい視野狭窄的な「部分性」と、そのような科学の実用への応用にはかならない技術の「手段性」とは、学問が全体と目的を見失って独走し暴走する由々しい危険を孕むものでした。事実、このフランケンシュタイン的危険は、二〇世紀半ば核兵器の開発発として、六〇年代には各種「公害」の発生となって顕在化し、その告発でもあった大学騒乱が結局うやむやの裡に終息してしまった後は、なお一層の環境破壊、さらには倫理抜き遺伝子工学・臓器移植医療にまで、深刻化する一方です。その結果でもあり、またその原因ともなったのが、わが国では、国立大学における著しく均衡を失した理系部門の肥大と云えましょう。そもそも、殖産興業・富国強兵を至上命題とする明治国家によって設立されたわが国の国立大学、別けても帝国大学は、生まれつき理系偏重の体質を免れませんでした。その一典型として、九州帝国大学も、その成立は、一九〇三（明治三六）年の医科大学（後の医学部³）と一九一一（明治四四）年の工科大学（後の

大教授も、事去つて数年後に書かれた本で、”あの愚にもつかぬ騒動“という主旨の酷評で一刀両断でした。たしかに、それどころか、大学の物的荒廃はさて措いても、古典的^{古典的}大学自治の崩壊はじめ負の遺産をすら大きくあとに残したと云つてもいいでしょう。しかし、意味あるものは皆無だったかといえ、私は決してそうは思いません。

人間存在の根底とのじかのかかわりで学問と大学のあり方を否定的にまで批判的に鋭く問う「専門バカ」「自己批判」「大学解体」のシユプレヒコールは、現代の学問者・大学人の多くが見失つてしまつていた原点への立ち返りを促してやまなかつたのではないのでしょうか。今となつては今昔の感ある「産学協同」反対の声も、アメリカにおける軍産学複合体を「他山の石」とするまでもなく、学問・大学が時の支配的経済利益に密着し癒着し終には隷属して自らの歴史的社会的存在理由を没却してしまうことへの警鐘として、その根本精神は今に妥当性を失つていないと云うべきではないでしょうか。学問は、たとえウェーバー流に「価値自由」に努めたとしても、却つてその無色性ゆえ体制にからめ取られる定めにあるし、大学は、学生を加工して企業に売り渡す以外の何ものでもないではないか。——この、意表を衝く告発に、果たして何びとが確信を以て反論しえたのでしょうか。

二〇世紀前半オーストリアの作家シュテファン・ツヴァイクは不朽の名作『人類の星の時間』(Sternstunden der Menschheit, 1943)で、世界史には時に「運命の秋」^{とき}「世紀の一瞬」と謂うべき濃縮された時間が姿を現わし、運命の女神の寵を獲た選ばれた者のみ、よくその風雲をわがものとして歴史の舞台に躍り上がる、としています。それからすると、われわれは、あの運命的な二年間、狐疑逡巡、とどのつまり自力解決を諦め権力に縋つたことで、女神の恩寵から見放されたということでしょうか。

以上、先ずは客観的な事実的経緯のみ、かいつまんでお話ししましたが、それでも、かなり長くなってしまいました。それもそのはず、ショックに次ぐショックが続いたこの二年間は、平時の二〇年にも相当する凝縮された濃密な月日だった、と私は思います。私自身、当初こそ、それまで私が馴染んできた古典的の大学自治を外から、いわんや内から脅かすそのような動乱に、強い拒否反応を示したのですが、ほどなく、政治的と非政治的とを問わず当事者の学生たちを衝き動かしているのが急激な高度資本主義化が生み出す人間疎外への不安・異議申立てという文明史的動機に他ならないのではないかといいことに想い至り、彼らの破壊的言動にのみ眼を奪われ情緒的に反撥し全的に否定するのでなく、荒っぽいやり方ではあっても学問と大学の存在理由にノンを突きつける彼らのラディカルな——すなわち、根元的、されば過激な——問題提起を、学問の府の徒としてまともに受け止めるべきではないか、と考えるようになり、それからというもの、苦しくも精神の高揚した充実した長い日々の連続だった、と想い起こします。封鎖のバリケードを単身乗り越え、殺気立ち喧嘩腰の彼らと議論したことも、幾度となくありました。結局、後に社会党代議士に転身した年長の同僚・政治学の嶋崎譲教授と二人して、何とか法学部だけは封鎖学生の「自主退去」に漕ぎ着けたのですが、紛争最末期には、例年のない夏の暑さと奔命に疲れた過労で先輩教授たちが次々に倒れ——もつとも、ストライキをもじって「ネトライキ」という揶揄も囁かれていましたが——、終に評議員のお鉢が最若年三六歳の私に廻ってきて、ほとんど連日開催の評議会で学長代行や他学部の学部長・長老連を向うに論陣を張る無謀を敢えてしたことも、忘れられません。

結論的に、では、そこから何が得られたか。あるいは、得られなかったか。今では、あれは一過性の熱病みたいなものだったのであり、あとには何も残らなかった、と見るのが定説のようです。私の知る或る高名な美学者の当時東

そうとする大学当局と、基地撤去までそうはさせじとそれに反対し終にはセンターそのものまで「産学協同」のシンボルとして建設阻止を呼号するに至る二派全学連を前衛とした諸勢力との間に、亀裂が走り緊張が高まります。それら諸勢力が大学評議会・学部教授会に要求する「大衆団交」なるものは次第に暴力的性格を帯び、反対陣営内の俗に謂う「内ゲバ」も加わって、「ゲバ棒」と称する角材や鉄棒と覆面のヘルメットに象徴される暴力が学内に横行し始めました。そのうち、大学側の優柔不断に業を煮やした一般学生の間から自然発生的に、ノン・セクト、ノン・ポリを標榜する「全共闘」が、大学人の「専門バカ」に「自己批判」を迫り「大学解体」を合言葉に紛争のアーリーナに登場してきます。一九六九（昭和四四）年の年明け早々には、新年度予算の復活折衝に滑り込みセーフを狙ったかのように、何者かの手で突如ファントムの機体は引き下ろされましたが、学内の混乱はもはや、それによって収束に向かうどころか却って鏈れを増し、いよいよ深刻の度を加える結果にしかありませんでした。東では、同じ頃、東京大学が全共闘による大学「封鎖」を機動隊を導入して解除、しかし翌年度の入試はついに中止の已むなきに追い込まれています。九州大学の場合、入試は何とか実施できたものの、一難去って又一難、取って替って新たに「井上正治学長事務取扱不発令」問題なるものが発生、それへの対処をめぐって学内は一層の動揺に見舞われます。さらに、政府が全国規模で事態收拾のため紛争大学の閉校や廃校を可能とする「大学の運営に関する臨時措置法」の制定に着手するに及んで紛糾は頂点に達し、この夏、九州大学もまた多くの部局が学内外セクト・ノンセクトの過激派学生集団によって「バリケード封鎖」される憂き目を見るに至りました。事ここにおいて大学は、キャンパスを追われ今日はこの明日はあそこと会場を転々しながらの評議会・教授会における何ヶ月もの小田原評定の挙げ句、一〇月一日、終に機動隊導入を決定、一四日には警察力による封鎖解除が強行されて、さしもの大紛争にも漸く一応の終止符が打たれたのです。

ところが、次の段階は全く思いもかけぬ展開となりました。折も折、全国的に、いや、フランス・アメリカはじめ全世界的に、学生反乱の火の手がにわかに燃え上がり、燎原の火の勢いで国中・世界中の大学に燃え拡がり燃え熾ったからです。わが国ではこれを「大学紛争」と呼びました。教授となり大学運営の一端を担わねばならなくなったばかりの私は、否応なくその渦中に捲き込まれ翻弄されたのです。一九六八（昭和四三）年と一九六九（昭和四四）年、まる二年という、過ぎてしまえば短い間でしたが、客観的に大学史上未曾有の一大エポックであったと同時に、主観的に私一己にとっても、それまでの学問観に根元的反省を迫られる生涯忘れることのできない大激動の時期でした。私の学究第二期である「衝撃期」として、あえて独立の時代区分とさせていただきます。

九州大学の大学紛争は、医学部の学生処分に端を發した東京大学や、不正経理の糾弾がきっかけとなった日本大学などとは違い、政治的事件絡みで起こったものでした。すなわち、一九六八（昭和四三）年が明けて直ぐ、一月、過激派学生集団「三派全学連」が、アメリカ原子力空母エンタープライズ号の佐世保寄港に反対する実力行動のため、大学の制止を強引に押し切って九州大学に集結、佐世保へ出動を繰り返した所謂「エンブラ事件」が、思えば不気味な前触れでしたが、今度は六月二日夜、折から大学が構内に建設中の大型計算機センターに、近くの板付基地へ着陸寸前故障した米軍ファントム偵察機が激突・炎上するという突発事件が、文字通り天から降ってきたのです。これが、まさしく発火点となりました。以後、事態は、全学挙げての基地撤去要求運動へというところまではよかったです。が、やがて、政府・米軍との折衝の行き詰まりから、ファントム機の残骸が五階に引っ掛かったまま中断を余儀なくされている大型計算機センターの工事をどうするかに学内の関心は移り、工事再開の予算確保に向け機体を引き下ろ

たは行先国が行う留学生試験の難関を突破する以外、方法はありません。私も、アメリカへ行くにはフルブライト、西ドイツへ行くにはフンボルト、いずれも現地の政府ないし財団が実施する選考を何とかパスし、それぞれ旅費・学費・滞在費全額先方持ちということで、やっと目的を達することができたのでしたが、ちょうど私の二〇歳代の初めと終りに当たった、しかも私にとって初の異文化体験となった、これら米独への留学は、当然のことながら以後の私に大きな影響を残すこととなります。何よりも、学問なканずく社会科学に不可欠の世界的視野に目を開かれました。そして、アメリカでは、神のみぞ知る、後年、熊本県立大学総合管理学部の構想に連なることとなる Maxwell Graduate School of Citizenship and Public Affairs での学習・研究の機会に恵まれ、西ドイツでは、学問の根底になければならぬ実存的な人間的誠実を、わが生涯ふたり目の恩師となったハンス・ペーターズ先生の人格から、無言のうちに学び取りました。

中世フランスはシャルトルの哲学者ベルナルは、われわれは巨人の肩の上にちょこんと乗った、ちっぽけな小人みたいなものだ、と云ったと伝えられます。すなわち、われわれが先人たちよりも、より多くを、そして、より遠くを視野に入れることができるのは、われわれが視力がより鋭かったり身長がより高かったりするからではなく、実は、先人たちの巨人的な背丈の上に持ち上げられ空高く支えられているからなのだ、というのです。学問において古今東西既得の成果を踏まえることの効用・大切さ、それなくして個人レベルでも社会レベルでも学問の向上はおよそありえないであろうことが、たくみな譬喩で指摘されています。その意味で私は、九州大学を拠点に、さらには米独留学を通して、まさに巨人の肩の上に攀じ登ろうと懸命に努力した。これが私の学究第一期Ⅱ摸索期ということになります。一九六七（昭和四二）年七月、教授に昇任して、私の学問活動は次の段階へ移ります。

然と将来に備えて個人レベルでの学問に専念していた私は、当初はまさに実学として法学部を選んだのですが、やがて、より高次の学問への関心が年毎に募ってきました。恩師・林田和博先生のお勧め、さらには先生のご尽力で文部教官・助手への採用が決まったことを機に、一九五三（昭和二八）年三月の学部卒業を前に私は学究の途に進む決心をするに至りました。林田先生は、熊本県は当時飽託郡・現在熊本市の御幸木部町のご出身、旧制の第五高等学校に学んでおられます。何十年もの後、恩師の故郷に私の大学生活のいわば仕上げの歳月を送ることとなるとは、神ならぬ身の知る由もありませんでした。

精確には——大学制度移行に伴う開学の遅れで——三年と七ヶ月弱だった学生時代、続く四年間の助手時代、そして一〇年を超えた助教時代、一九四九（昭和二四）年から一九六七（昭和四二）年にかけての併せて一八年が、私にとって「摸索期」とも謂うべき学究第一期です。社会科学の分野で究極レベルの学問は如何にして可能か。これがこの時期の私の問題意識でした。その頃、わが国の社会科学界はマルクス主義の天下です。私もマルクス主義に関して人並みの勉強はしました。しかし、旧制中学生になったばかり、感性瑞々しい少年のとき、敗戦を境に価値の大逆転を体験し、昨日までの軍国主義教師が一朝にして見事に民主主義者に変身した苦々しくも唾棄すべき茶番劇を眼のあたりにしていた私は、何であれ絶対主義的な思想にはなじめないものがありました。私が、あえて時流に棹ささず、マックス・ウェーバーやハンス・ケルゼンの相対主義に、——もちろん相対主義的すなわち批判的に——導きの糸を求めようとした所以です。

この摸索期に私にとって特記すべきは、二度の外国留学でしょう。最初は、一九五五（昭和三〇）年から一年間のアメリカ、次いで、一九六一（昭和三六）年から二年間の西ドイツでした。日本が未だ戦後の経済再建の途上にあり、嚴重な外国為替管理のもと海外渡航は原則的に禁止状態だった当時のこと、大学人の場合、日本を出るには日本国ま

年目のこの年は、マクロにはわが国の大学の歴史にとって、そしてミクロには私個人にとっても、画期的な大きな意義を持ちます。すなわち、アメリカ占領軍の圧力の下、わが大学制度は改編され量的に拡大されて、全国的に所謂「新制大学」が発足しました。熊本女子大学も、その二年前に設置されたばかりの旧制の公立女子専門学校から新制度の公立大学に昇格、五月二日に開学しています。国立の新制大学は、記録によると「大学設置費削減のために」開設が遅れ、第一回入学式は九月にずれ込みました。実は、私自身、新制大学の第一期生として、九月一〇日、九州大学の門をくぐったのです。

九州大学は、戦前からの所謂旧制大学でしたから、私たち新制一期生が入った後もなお四年間、すなわち最後の旧制大学生が卒業するまでは旧制大学の体制が並行して残存し、私たちは専門課程では旧制・新制の学生入り交じって講義を受け演習に参加したものです。こうして、私の大学生活が始まりました。

当時の私は、学問というものを、大学というものをどう考えていたのでしょうか。未だ学問を生涯の仕事とする人生設計を立てていたわけでもない十六歳そこそこの少年の、その点についてのとらえ方を、今の時点から忖度してみますと、おおよそ次のようなことではなかったかと思われまます。学問なるもの一般を、知的地平を押し拡げてゆく人間知性の営みと解するならば、個人レベルでは、先ずは学習によってその人その人の知的な視野を拡張することが学問であり、より高次の究極レベルでは、社会全体としての知的極限をさらに地平線の彼方、未知の世界へと拡大することが学問に他なるまい。そのために必要となる教育と研究を制度化したものが一般に学校であり、なかんずく、究極レベルでの学問のための教育と研究に専ら携わることを社会的に負託されているのが大学である。ざっと、こんなところではなかったでしょうか。

今日からすると想像を絶する物質的貧困、しかし、それだけ精神は生き生きと躍動していた時代の雰囲気の中、漠

この——決して短くなかった——私の大学体験に即しながら、僭越を承知の上で「私の哲学」を語ってみたい。紫苑会の本田会長から退任の記念講演をとお申し出を辱けなくしたとき、私は反射的にこう考え、そうお答えしました。本日ここにこうしてその機会を与えられ、私の喜びこれに過ぐるはありません。と共に、今となって、あのとき咄嗟に浮かんだ大それた演題にふさわしいお話が果たしてできるかどうか、いささか不安に駆られてもいます。しかし、少しでも、お耳を汚すに値いする中身のものとなるよう、及ばずながら極力努める所存です。

もっとも、私は一介の法学徒に過ぎませんので、「私の哲学」とか大仰に銘打っても、難しい術語を操る専門的な哲学理論や哲学体系のことでは勿論ありません。英語の、とくに私の経験ではアメリカでよく耳にした “my philosophy is that” という言い回しで使われる「フィロソフィー」、すなわち、根本的・原理的な「ものの見方、考え方」、ちょっと捻ってもせいぜい「人生観」「世界観」といった意味合いです。されば、今日まで半世紀の余、一貫して大学人であつてきた私の場合、この意味での「私の哲学」とは、大学人としての私の「ものの見方、考え方」の根底、換言すれば「学問観」「大学観」とご理解ください。

それでは、以上を前置きとして、これから、熊本県立大学と九州大学、両つの大学における五十一年間の自分史を素材としながら、「学問とは何か」「大学とは何か」について懐う所の一端をお話ししてみることと致します。

—

さて、今を去る五十一年前、一九四九（昭和二四）年とは如何なる年であったか。戦火の余燼なお燻る戦後僅か四

私の哲学

—五十二年間の大学生活から—

手島 孝

これは、二〇〇〇（平成十二）年八月二十九日に行われた熊本県立大学学長退任記念講演を、口述スタイルそのままに文字化したものである。予め用意された完成原稿に準拠したが、今回本誌に収録するに当り、区切りの箇所に一から五まで節番号を振り、また、講演では触れなかった若干の註記を付した。

熊本県立大学同窓会「紫苑会」が、ここに私の学長退任記念講演をご主催くださいますこと、まことに有難く存じます。また、折しも残暑厳しいさ中、このように多くの方がたが足をお運びくださり、光栄この上ありません。

私、明後日・八月三十一日を以て、二期六年に亘った学長の任期を満了し、同時に、熊本県立大学を退職いたします。一九九四（平成六）年四月、前学長・前知事のご懇望もだしがたく九州大学を中途退官して本学に赴任してこの方、六年五ヶ月、微力ではありましたが力の限りを尽くしました。

前の大学には、入学以来、法学部を卒業後直ちに助手、さらに助教授、教授、学部長として、四十四年半余を過ごしました。したがって、これを本学での六年五ヶ月に加えようと、ほとんど五十一年に垂んとします。